
泡沫風花

椎名玲青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泡沫風花

【Nコード】

N3684BA

【作者名】

椎名玲青

【あらすじ】

異世界ファンタジーから、日々の些細な出来事まで。詩と短編未満のお話達。

飛行機雲

なんでもない日の、手持ち無沙汰なだけの午後。

青でも白でもない中途半端な色をした空の片隅を、高く迷いなく伸びていく、一筋の飛行機雲が横切った。

ひとり置き去りにされたその雲は、なのにあまりにも白く真っ直ぐで。

気付けばそこに足を止め、私はただ、遠く町並みに切り取られた空を見上げて、立ち尽くしていた。

他のたくさんの雲達のように、風に流され、形を変える暇もなくすぐに風に散らされて、はじめから何もなかったみたいに、消えてしまっただけなのに。

あの雲は、どうしてこの目に、こんなにも鮮やかに映るのだろう。

それは、過ぎていく日々の中で、いつしか忘れたことすら忘れてしまっただけの。

いつかの記憶と混ざり合っていくだけの、なんでもない日の、小さな出来事。

空のどこかに消えてしまったあの雲が、先を行った飛行機に追いつくことはないけれど。

薄く雲に覆われた水色の空と、雲の切れ間からこぼれる柔らかな日差しが、いつもより少しだけ心地よく思えた。

そんな日の、出来事だった。

慷慨悲歌

もしもこの世がまっさらで
神も思想もなかったら

顧みられぬ祈りの声は
人の心に届くだろうか

自覚と契約の名の下に
争うことはないのだろうか

顔を背けて天を仰ぎ
紡ぐ祈りのその歌が
救世のためだと言うのなら

昇り切った梯子の先にも
躊躇うことなく踏み出すだろう

硬く閉ざしたその瞳が
嘆きの涙を映すなら

傍らで消えた温もりを
縫う力をなくした腕を

何ひとつ受け止め切れない
この両手を
差し出すことさえ厭わない

こぼれ落ちた果敢ない命を
ただひととき

祈りをほどこ

この手の中に抱いたことを

もしも貴方が

罪と呼ぶのを赦さなければ

私が貴方に

背を向けることはなかったのだろうか

永遠を願う貴方を

蔑むことはなかったのだろうか

君のために紡ぐ歌

君と並んで腰掛けた、いつもの青い屋根の上。
手を伸ばしても届かない、遠い水色の空の下で。

あの日、届かなかった祈りを捧げている。

捨ててしまった歌声を、君がくれたハーモニカの、銀の優しい音色に変えて。

++++

いつか、この歌が届いたとき。

神はきつと、我々を救ってくださるだろう。

村に伝わる古い伝承には、確かにそうあった。

だから僕達は――空を追われた翼の民は、ひとかけらの迷いも持たずに、天に向けて祈りの歌を紡ぎ続けた。

そして命果てるそのときまで、神に祈り続けた哀れな一族は、僕ひとりを残して絶えてしまった。

どれだけ願っても、天に歌声は届かなかった。

神の翼を背負ったこの身を、神は救ってはくれなかった。

この声が呼び寄せたのは、ただ、災いだけだった。

もどかしくて、やりきれなくて。

己の無力さに、苛立って。

捨ててしまったこの声が届かなかったように、この音色もまた、天に届きはしないのだろう。

けれど、届かなくて良かったのかもしれないと、思うことがある。
例えば今、このときのように。

祈りは、天になんか届かなくていい。

本当はそんなこと、僕は望んではいなかったのだから。

僕が本当に欲しかったのは、神の救いの手なんかじゃなくて、この手で触れることが出来る確かな何かだった。

超然的な何かに、救いを求めていたとは思う。

あの日、あのときまでの僕は、『救う』という言葉が何を意味するのかを知らないままに、漠然とした不安を、ただ闇雲に消し去って欲しいと願っていた。

けれど今、このときに思うのは。

あのとき、この手が欲していたのは、確かな何かだったと。増していくばかりの不安を、大丈夫だと抱きしめてくれた君の腕と、揺らぐ心を包んでくれた君の声だったのだと、そう思う。

風に乗せただけでは、届かないと。

そう教えてくれた君が、誰より近くに感じられるこのときに。

捨ててしまった僕の声が、君の耳に触れることはないけれど。

思う心は、もう言葉には出来ないけれど。

なくした僕の声に、耳を傾けてくれた君のため。

思う心まで捨ててしまった訳ではないのだと、気付かせてくれた君のために。

僕の祈りはいつまでも、君に捧げ続けたい。

高く澄んだ空の下、風に乗せて紡ぐ祈りは、この思いを繋げるために。

誰よりも傍に居てくれる、たったひとりの君のために。

君のために紡ぐ歌（後書き）

前回投稿した『慷慨悲歌』の別バージョンです。

しあわせのかたち

ふかふかの耳と、ふさふさの尻尾
もこもこ毛並みの、あつたかいにおい

お見送りの時の、キラキラつぶらな瞳も
お帰りなさいの、勢い余った体当たりも

ドア一枚隔てた部屋で眠る私を起こす、豪快な鼻息と
ぐっすり眠っている時の、小さな寝言や可愛いイビキも

どんなあなたも、大切に愛しくて

もしも幸せに形があるとしたら
私にとってのそれは、きっと

今、足元で眠っている
あなたなのかもしれないな、と

今年も無事に迎えることが出来た、十四回目のあなたの誕生日に
少しずつ現れ始めた不調をやり過ごして
来年の誕生日もまた、一緒にお祝い出来ますようにと祈りながら

足首に不意打ちの肉球キックを食らいつつ
ふと、そんなことを考えてみたのでした

しあわせのかたち（後書き）

PCのデータ整理をしていて発掘した、我が家の先代犬のお誕生日記念の詩。

ちなみに1993年3月23日生まれのパメで、十五回目の誕生日は、ちゃんとお祝いすることが出来ました。

おやすみ だいすき

『おやすみ』

受話器越しのあなたの声が

そばに居て

手をふれて

目をあわせて話すより

もっと

ずっと

こんなに近く聞こえたから

こらえて

あふれた

愛しさが

ちいさく返した「おやすみ」に

少し滲んでゆれてしまった

『だいすき』

受話器からこぼれた

寂しげに揺れた君の声

きもちも

ことばも

みんな君にあげられるのに

どうしても

抱き締めることは出来ないから

開いた携帯電話の中

僕の隣で微笑む君に

大好きだよ

ありったけの笑顔に添えて

送ったこの言葉なら

ここにある温もりを

少しは君に届けられるかな

おやすみ だいすき（後書き）

文字数の都合で、2編で1頁になっております。

t a s t e

例えば、それは

カステラの茶色い部分や

メロンパンのクッキー生地の間っこや

きつね色に膨らんだマフィンの天辺で

私はそれが

とてもとても、大好きなのだけれど

悲しいことに

それらはみんな、メインの部分と比べたら

ほんの少しの量しかなくて

私はそれを

いつもいつも、もっとたくさんあったら良いのにな

いっそ、この部分だけで商品化してくれないかな

などと思いながら

時には、お行儀悪く選り分けたりなんかしながら

ゆっくりと、こっそりと

甘いひと時を楽しんでいるのである

けれど、仮にその願いが叶って

メインとそれ以外の部分の分量が
入れ替わったものが目の前に現れたとしたら
いっそ、それが普通になってしまったとしたら

私はやっぱり、今と同じに

それらを好きだと思ふのだろうか

それとも、今と同じに

少ない部分の方を、好きだと思ってしまうのだろうか

温かなココアの上で溶け出して

ゆらゆら回るホイップクリームを眺めながら

そう言えば、アイスココアの氷に触れて

シャーベット状になった生クリームも

美味しいんだよね、と

背中合わせた隣のテーブルへと運ばれていく
涼やかなグラス達を見送って

ゆるゆると、きらきらと

今日ものんびり、午後の時間が過ぎて行く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3684ba/>

泡沫風花

2012年1月13日20時51分発行